

池田屋の変（峰章山）

初夏の洛街花除やかに霞む

花を踏んで徒は決す浅宵の家

刻は惟二更蜜談の折

撃つは是五刃隊士の牙

池田屋の房は血海の若く

新撰組の剣は叫譁に舞う

取り得たり密偵宮部の首

掌を合わせて天を仰げば月影斜なり

初夏洛街花徐霞 踏花徒決浅宵家

刻惟二更密談折 撃是五刃隊士牙

池田屋房血如海 新撰組劍舞叫嘩

取得密偵宮部首 合掌仰天月影斜

解説 幕末の旅籠・池田屋に潜伏していた長州藩・土佐藩などの尊王攘夷派志士を新撰組が襲撃した事件を描いた作品。

語釈 ※初夏しよか 夏のはじめですが、暦の上だと、五月から六月初めの頃を指す。※洛街らくがい 京都の市街。※徒と 仲間。※浅宵せんしやう 日が暮れてまだ間もないころ。※二更にこう 現在のおよそ午後九時から十一時頃。また、午後十時から午  
前零時頃に当たるともいう。※蜜談みつだん 密かに相談すること。※五刃隊士ごじんたいし 新撰組 幕末の京都。従来から京都の治安維持にあたっていた京都所司代と京都町奉行だけでは防ぎきれないと判断した幕府は、清河八郎による献策で浪士組の結成を企図した。江戸で求人したあと、京に移動した。しかし清河の演説でその本意を知った近藤勇や芹沢鴨らが反発、京都守護職の松平容保の庇護のもと、新撰組として発足した。※叫譁きやうか やかましく騒ぎ立てる。※密偵宮部みつていみやべ 宮部鼎蔵。熊本藩士。吉田松陰の親友。池田屋で新撰組に襲撃され自刃して果てた。※月影げつえい 月の光。月のあかり。

通釈 初夏の京都の街は霞がかかったようで、ぼんやりとしている。そこに日が暮れて間もない頃、新撰組が池田屋を取り囲んだ。その折り、尊王攘夷派志士達は密談していた。機会を狙っていた新撰組が踏み込み、新撰組の剣の牙が炸裂し、池田屋の部屋は血の海となった。そして、密偵・宮部の首を討ち取り、また、切り果たした尊王攘夷派志士達に手を合わせ、池田屋から外に出て天を仰ぐと、月の光は京都の街を斜めに照らしていた。